節

〔古事記中神武〕將擊登美毘古之時、歌曰、美都美都斯、久米能古良賀、阿波布爾波、賀美良比登母登、曾泥賀母登、曾泥米都那藝氏、宇知氏志夜麻牟、

〔古事記傳十九〕曾泥賀母登は其根之莖なり、○略中根之莖とは、先凡て本草に母登と云は、立る幹のことにて、必しも末に對へて云本には非す大祓詞に繁木本乎とあるも、繁木の木立を云、孝徳紀歌に、模騰渠等爾、波那播左該騰模とあるも、木毎と云ことなり、又一もと二もとなど云も、木にては一木二木と云に同じければ、草も其意にて生立る莖を以云なり、

〔倭名類聚抄二十木具〕半天河　本草云、半天河、和名、木乃字豆保乃見豆、陶隱居曰、竹雞頭水也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕千金翼方草部下品載之、本草和名同、證類本草玉石部下品載之、云唐本元在草部、略○中證類本草引、竹上有此字、本草和名引同、

〔倭訓栞前編四〕うつほ　空の義なり、略○中うつほ木は籔木也、うつほぶねは獨木舟也といへり、略○中倭名鈔に半天河水、きのうつほのみづと見えたり、うつろといふもうつほと同じ、窪をよめり、

〔源平盛衰記二十一〕兵衛佐殿隱臥木附梶原助佐殿事

兵衛佐殿ハ、土肥杉山ヲ守テ、掻分々々落給フ、略○中鳴ノ岩屋ト云谷ニヲリ下リ見廻セバ、七八人ガ程入ヌベキ大ナル臥木アリ、略○中佐殿今ハ遙ニ落延給ヒヌラント思ケレバ、木ヨリ飛下テ、跡目ニ付テ落給ヒ、同伏木ノ天河ニゾ入ニケル、略○中大場伏木ノ上ニ登テ弓杖ヲツキ踏マタガリテ、正ク佐殿ハ此マデオハシツル物ヲ、臥木不審ナリ、空ニ入テ捜セ者共ト下知シケルニ、略○下

〔倭名類聚抄二十木具〕節　四聲字苑云、節、子結反、和名布之、今案從竹者竹節、從草者草木節、見玉篇、草木擁腫處也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕按今本玉篇不載節字、其他字書亦無有、從草者蓋俗字也、此云見玉篇恐有誤、節又見竹具、

〔倭訓栞前編二十六〕ふし　竹木の節は經より出たる詞にや、草には節と書り、又信也と見ゆ、歌曲不